

たとき霞ヶ浦全域十四地点のうち六地点では湖底の酸素は2.8M以下でした。測定点は湖岸から数百米沖合ですがこの結果からは霞ヶ浦の沿岸部の四割をこえる場所ではもともと強いフナでさえ生息できない程酸素がなくなっていることを示しています。そういう場所は例外なくヘドロ地帯です。鯉やフナは底に棲んでいて底の餌を拾って食べる魚ですから、これでは生きていけません。逃げだすことの出来ないイクスの鯉はあわれ枕をならべて犬死にならぬ鯉死になつたわけです。ヘドロ地帯はメタンガスや硫化水素やアンモニアを出す微生物が主人公となつたドロブのようになっていゝのです。

青コ（水の華）!!

湖水の酸素を奪って鯉を死にたらしめた犯人の一人として青コの問題になっています。別名を水の華という洒落た名前があります。水の華は学名をミクロキシテスというプランクトン（浮遊藻類）の一種ですが、今回霞ヶ浦に異常発生した青コは今までにない別種のものともいわれています。私には、その区別がわかりませんが、今は霞ヶ浦のどこにいても水の表面には寄せ集まって緑色のカタマリになつたこのプランクトンが覆っています。ひざ程の深さもないところですから、底がみえな

い程濁りきっています。青コは植物の一種ですから、太陽の出ている間は炭酸ガスを吸って水の中に酸素を出しますが、日が落ちてしまうと光合成をやめて、逆に酸素を吸って炭酸ガスを出す呼吸にきりかえてしまします。だからヒルとヨルでは極端に水の中の酸素量が変わってしまうのです。その上、底泥のヘドロの中には有機物が豊富にあつて、それを分解する微生物が夏の高温ですっかり活発になり、只でさえ少なくなつた酸素をヨル、ヒルわがちなく吸いつくしてしまします。そして又、微生物による分解物は再び青コの良い栄養となつて異常増殖を促進しています。こういう悪循環がはじまると湖は一へんに老令化をはやめていくことになるのです。このように青コは滅びゆく湖に咲く水の花（華）なのです。

富栄養湖

青コが異常発生するのは湖が富栄養したときの特徴の一つです。流入する汚濁物質の中にふくまれる窒素とリン酸が青コの増殖を促進するといわれています。窒素やリン酸は下水や尿にいっぱいふくまれています。したがって無秩序な都市化がおこなわれると下水や尿がたれ流しになることが多いので湖を富栄養化する大きな原因となります。食品関係の排水 \parallel たとえばコーラ会社や